

(5) 映画演劇研究会

映画演劇研究会に所属したことは加藤自身も書いているが、研究会としてどんな活動をしてきたかについては、何も書いていない。

加藤は祖父に連れられて映画を見に行っていたことは第1章にも触れた。映画を加藤は終生好んだ。当時の加藤が見た映画に、どんなものがあったか。福井優の丹念な調査によれば(2020年の共同企画展示「我を人と成せし者は映画——加藤も丸山も映画大好き」)、以下のよ
うな映画を見ている。

1937(昭和12)年には『ゴルゴダの丘』(J・デュヴィヴィエ監督)、『地の果てを行く』
(同)、『我等の仲間』(同)、『オペラハット』(F・キャブラ監督)、『ミモザ館』(J・フェデー監督)、『新しき土』(A・ファンク、伊丹万作監督)、『どん底』(J・ルノワール監督)。

1938(昭和13)年には『鎧なき騎士』(J・フェデー監督)、『冬の宿』(豊田四郎監督)、『泣虫小僧』(同)、『にんじん』(J・デュヴィヴィエ監督)、『舞踏会の手帖』(同)、『綴方教室』(山本嘉次郎監督)、『牧場物語』(木村荘十二監督)、『路傍の石』(田坂具隆監督)。

1939(昭和14)年には『望郷』(J・デュヴィヴィエ監督)、『素晴しき休日』(J・キューカー監督)、『ブルグ劇場』(W・フォルスト監督)、『土と兵隊』(田坂具隆監督)。

加藤が見た映画の大半は洋画である。なかでもジュリアン・デュヴィヴィエ監督の映画は「全部見た」というように、加藤のお気に入りの監督だった。また、実妹本村久子氏は「封切られる映画のほとんどすべてを見ていた」と証言するが、加藤は日本公開されるとすぐに見ていたことも分かる。洋画を見ながら、加藤は「西洋」を見ていた。のちに加藤は「映画

は西洋への窓」だった、と述べる。映画は、風景や日常生活、言葉やしぐさなどを映し出すものだからである。

映画評は、一高時代から晩年に至るまで、折にふれ書きつづけた。一高時代に発表した映画評はすべて『向陵時報』に寄稿したものである。『ゴルゴダの丘』(1936年12月16日)、『新しき土』(日独合作映画、1937年2月18日)、『鎧なき騎士』(1938年2月1日)、『冬の旅』(1938年10月18日)の批評を書いた。今日の映画評でさえ、多くはストーリー批評に終わっているが、加藤の映画評は早くから映像批評として書かれていることに驚かされる。



映画館だけではなく劇場にも通った。通った劇場は歌舞伎座と築地小劇場である。歌舞伎座では主として「一幕見」で観た。六代目菊五郎(写真左)、15世市村羽左衛門(写真右)、初代中村吉右衛門ら名優たちの活躍した時代であり、彼らの「芸」に加藤は酔った。「科白の意味などはどうでもよかったし、いわんや芝居のすじは問題ではなかった」と述べている。

築地小劇場で見た芝居には「科白の意味があり、登場人物の性格や立場や心理があった」。要するにドラマトルギーを楽しんでいたのである。観た芝居には、『どん底』(当時の外題は『夜の宿』、ゴーゴリ原作)、『桜の園』(チェーホフ原作)、『北東の風』(久板栄二郎原作)、『火山灰

地』(久保栄原作)、『アンナカレーニナ』(トルストイ原作)、『土』(長塚節原作)、『キノドラマ新撰組』(キノドラマとは芝居の一部に映画を取り入れた上演方式である)、『春香伝』(李氏朝鮮時代の説話)、『秋水嶺』(内村直也原作)、『釣堀にて』(久保田万太郎原作)などがある。なかでも『北東の風』と『火山灰地』は築地小劇場時代、プロレタリア演劇運動時代の頂点をなす作品として知られる。加藤は築地小劇場について「反時代的な精神において舞台と観客の間に一種の暗黙の了解が感じられたと」といっている。その一種の連帯感の経験が、のちに『富永仲基異聞』という戯曲を書かせることになった。

このように歌舞伎と新劇の両方を観ているのだが、『アンナカレーニナ』『土』『キノドラマ新撰組』『春香伝』『黴』『火山灰地』『秋水嶺』『釣堀にて』の劇評を書いた。しかし、歌舞伎評はひとつも書いていない。この時代、加藤は能・狂言はまだ観ていない。文楽については、まったくどこにも書かれていない。